

アルチンボルド展

国立西洋美術館（東京・上野公園） 2017.06.20～09.24



「ジュゼッペ・アルチンボルド」(1527～1593)は、16世紀後半にウィーンとプラハのハプスブルグ家の宮廷で活躍したミラノ生まれの画家・宮廷演出家で、画風はひとときわ異彩を放っていた。

画伯は、静物画のように緻密に描いた果物、野菜、木の根、動植物、本などといった身近なモチーフを、思いが

けない形で組み合わせた数多くの寓意的な肖像画の作家として認められている。

彼の奇想と知、驚嘆と論理とが交差する作風は、謎やパズル、風変りなものに魅了されていたルネサンス期を反映しているもので、20世紀以降のシュルレアリスム以後のアーティストたちに多大な刺激を与えたことで知られている。

本展は、本邦では初めてユーモアのある知略の芸術の世界を本格的に紹介する企画で、世界各地の主要美術館が所蔵する「アルチンボルド」の「油彩画10点」を中心に、約「100点」の画伯の出品作品を展示して、イメージ世界の生成の秘密に迫ると共に作品の中に画伯芸術の位置づけを見直すという試みである。

代表作《春》《秋》《冬》(左から)の連作(1563～1572年)《夏》は上部



《春》は、春に芽吹く数多くの花と植物で男性の頭を飾った作品は、一度見たら決して忘れることのできない“強い印象と奇妙な感覚を与える作品”である。《夏》は、きゅうり、玉ねぎなどの夏野菜や葡萄、野苺などの果物で飾られた男の横顔が、鮮やかなコントラストにより表現された完成度の高い作品である。《秋》は、実りを象徴する果物・野菜・紅葉などから男像が構成されている。《冬》は、春～秋の三枚とは全く異なり、枯れ朽ちた一本の樹木を中心の作品であるが、右下のレモン・オレンジは来るべき春への希望であると見られる。

参考書籍 マイオリーノ著：《アルチンボルト エキセントリックの肖像》(1998)